

むらさき抄

上

富田常雄



落丁・乱丁の場合は
お取りかえ致します

むらさき抄（上）

昭和三十六年十二月十日 発行

定価 三百三十拾円

著者 富田常雄
発行者 矢貴東司
印刷所 北山印刷株式会社

発行所 株式会社 桃源社

東京都中央区日本橋新堀町一丁目十二番地
電話（六七）四〇〇一、二番
振替東京六四三五一番

目次

夕	鴉	五
朝	顔	六
夕	立	三
曉	開	四
曉	花	五
草の	ように	七
絵	絹	八
浅き	夢見し	九
う	つし世を	二
草の	歴史	三
少	年行	四
女	の地	五
恋	の理	六
魔	女について	七
力		八

春浅くして……………	三〇九
迷宮……………	三三九
かるた会にて……………	二四〇
老いらく……………	二四八
稚拙なもの……………	二五九
冴え返る……………	二六九
狂った針……………	二八〇
無理心中……………	二九一
寄り添う魂……………	二九九
前掛け姿……………	三五

むらさき抄

上卷

夕 鴉

二重橋前で、皇居に向かって深々と最敬礼をした実千代が顔をあげると、折りから、暮れなずむ大内山の杜をめぐって夕鴉が群れながら飛んで行った。

それが、実千代に不吉なものを予感させて、思わず、眼を玉砂利の上に落とした。

明治四十五年、七月二十日に天皇陛下の御不例が発されてから、もう、三日になったが御容態は樂觀を許さなかった。

今日、学校で四年の生徒達が、親の許しを得て、五人揃って、陛下の御平癒を祈りに二重橋前へ行ったという話を、お休み時間の運動場で耳にした時は、上級生の自分が、なにか、女学生としても、国民としても誠意が足りないような気がして耳朶が熱くなった。

だから、学校から帰ると

「お母様、実千代、二重橋へ陛下の御平癒をお祈りに行ってもよろしくって」

紫メリンスの袴をぬぎながら、そう言った。

「これから？」

「ええ」

「ひとりで」

「そうよ、お友達を誘う暇がなかったんですもの」

「それは行くのは結構ですけど、じゃあ、お加代を連れてお行きなさい」

「お加代は田舎者で、電車の中でも大きな声で、そうずら、こうずらって言うんですもの。それに、迷子の可能性がすこぶる強いんですもの」

「ほほほ、でも、枯れ木も山の賑やかしと言うこともあるから」

と、母は苦笑した。

「着物はなんにしようか知ら」

「派手な服装はいけませんよ」

「勿論だわ」

それでも、浮き草をばかした細の着物に緞子の帯を締めたのは娘盛りとしては是非もなかった。

実千代の心配は的中して、続々と二重橋前に集まって来る東京市民の人波に気を吞まれたか、お加代は忽ち行くえ不明になってしまった。

仕方なく、彼女は自分だけで遙拝して、陛下の御平窓を祈願したが、今、眼にした夕鴉の群れが不吉で気にかかった。考えてみれば、大内山に樹木が多く、鴉が塹にして、夕方に帰って来るのだと判ることだったが、こういう時なので妙に不吉な気がした。

暮れかかった自分の左右を見ると、暁星学校の制服の子が、その母と二人並んで土下座をして拜んでいたし、盲人らしい人々が引率されて、杖を抱いたまま遙拝していた。そうかと思うと、ひと眼で知れる芸者らしい女が、口の中でお題目を唱えて熱心に拜んでいた。

誰も心は一つなのであろうと思うと、実千代は、女中が迷子になったのも忘れ、胸が塞がり、涙が溢れた。

蚊柱が実千代の頭の上を掠め、暮色はようやく濃くなって、皇居の緑の杜が、いつか黒ずんで居た。

陛下の御平窓を祈願する人々が後から、後からつづいて、御不例という悲しい場面にもかかわらず二重橋前にはしめやかな興奮と、声のない賑やかさがあった。宮城

をめぐる市電が最徐行で走っている音が、かえって、平素よりも耳について、すでに点されたアーケ燈が青く淋しかった。

ふと、気付くと、二重橋の上に菊花御紋章の提灯が三つ高く振られていた。市民の遙拝に答える主殿寮の人達が振る提灯だった。

濠の前の鉄柵をはなれた時、実千代は低い声で

「お加代。お加代さん」

と、呼んで見た。

勿論、答はなく、ただ、玉砂利を踏む人々の蹠音だけだったが、その時、実千代は危うく躓きそうになった。

ゆるんでいた丸小町の駒下駄の、淡桜色の鼻緒が切れて、よろけると、思わず脇を歩いていた人の肩にぶつかった。

「あ、失礼」

そう言い、姿勢をもどした時、

「鼻緒が切れたんですか」

と、若い男の声がした。

ぶつかったのは、角帽をかぶり白緋の着物に小倉の袴をはいた大学生だった。

「失礼しました」

赤くなつて、実千代は片足は裸足のまま、下駄を探し

た。

「見つかりませんか」

大学生は見かねて、自分も暗い砂利の上を探した。

「あった、あった」

若い学生は実千代の下駄を高くさし上げて見せてから、自分の朴歯の下駄の片方をぬいで彼女に差し出した。

「おはきなさい」

「いえ、よろしいんですの」

「足袋が汚れる。僕は構わん。その濠端ですげて上げよう」

「いえ、あの」

「いいです、いいです、こんなのは造作ないから」

独りできめて、彼はさっさと人を避けて濠端にしゃがむと、腰の手拭を音をたてて裂き、手早く、前鼻緒をすげ始めた。

実千代は身のすくむ思いがした。こんな事は初めてだったし、まして、相手が大学生であることに戸惑っていた。

大学生の方は彼女の遠慮や羞恥にお構いなく、すげた鼻緒を試してから

「僕では下駄屋ほどにはゆかかんが」

そういつて、実千代の足元に下駄を置いた。

「ほんとに恐れ入りました」

実千代は適当な礼の言葉が見出せない程、恥ずかしく、上氣していた。

太い鼻緒の朴歯の下駄を自分の駒下駄にはきかえて、実千代はそれを学生の方へ差し出そうとすると、ぬっと、大きな足が出て、学生は忽ち、自分の朴歯をつっかけた。

「悲しい賑やかさですね」

大学生は玉砂利の上を声もなく右往左往する黒い人影を見て言った。

「僕の予感悲観的だな、陛下の御病氣は絶望なのではないかと思う」

「なんだか、そんな感じがしますわね」

屈託のない学生の態度に実千代もつり込まれた。

「僕は迷信なんか絶対に信じてないんだが、今日はいけなかった。夕方、二重橋前に来た時、鴉が宮城の杜へ、いやな声で啼きながら群れてゆくのを見て駄目だなと思った。よく、鴉啼きが悪いというが、こういう時は、そんな事が悪い予感と符合していけないな」

「わたくしも夕鴉を見て、不吉だなと思いましたがよ」

「ご病氣は糖尿病というのだから、僕なんか大した病氣

だとは感じないんだが、いけないのかなあ」

二人はどっちからともなく並んで、夜の祝田橋の方へ歩いた。

実千代は、ただ一度会い、鼻緒を上げて貰っただけの大学生と一緒に歩くなぞは、軽はずみで、つつしみを忘れた女学生と非難されることは承知だった。しかし、だからと言って、礼だけすましたらさっさと別れるというものも非常識な話だと思った。それに、彼女はこの大学生に好感を持ったし、別れがたいものを覚えたのは争われなかった。

「女中を連れて来ましたのよ、そうしたら、はぐれてしまつて」

「見つからんですか」

「ええ」

「交番に行ったら、どうですか」

「でも、うちが近いし、まさか、迷子になつて交番に行つてるとも思えませんし」

「おうちはどこですか」

「赤坂の福吉町ですの」

「ほう」

大学生は太い眉をあげて、意外なような表情をした。

「僕は溜池と山王下の間です」

「あら、眼と鼻の先ですわね」

思わず、実千代はつりこまれた。

「学校は明治でいらっしゃるんでしょ」

「山王下から電車に乗るんだが」

「わたくしも。でも、どうして、お眼にかかったことなのかしら、わたくし跡見女学校ですの」

偶然に家が近かつたことが、大学生と実千代の二人に親しみを強くさせた。

「ずっと、福吉町ですか」

「ええ、父が医者をしています」

「会わないというものは、そんなものかな。もっとも、僕は学校へ行く時間がでたらめだから」

と、学生は苦笑した。

「ところで、女中さんはどうしますか」

「歩いて帰ると思いますわ」

「東京に慣れているんですか」

「あんまり。島育ちの娘ですの。伊豆の大島」

「珍しいな。大島とは」

二人は相談したのでもなかったが、いつか、日比谷公園に入っていた。

「福吉町の病院というと、僕はあの辺をよく散歩するけれど」

「井手内科」

「あ、あのお医者さんか、もともと、僕は病気をした事がないから縁がないけれど、よく、前を通った。しかし、不思議だな」

「なにがですの」

「会わなかったというのが」

「だってそういうこともありますわ」

「君は箱入り娘で、学校以外には絶対に外へ出ないんですか」

「いいえ、一ツ木町の縁日にも行けば、活動写真だって見に行きましたよ」

二人は、最近までは音楽台と呼ばれていた音楽堂の近くへ来たが、アーク燈をほのかに受けて並んでいる聴衆席の木の腰掛けに掛けることは見合わせた。うっかり、腰かけて寄り添ってでもいようなものなら「おい、こちら」と巡査にとがめられて、密会扱いをされ、下手をすると風俗破壊だとおどかされる恐れがあったからだった。

「そうだろうな。どうして会えなかったんだらう。おかしい」

と、青年は首を傾けた。

「なぜ、そんなこと気になさるの」

「少しくやしいんだ。君のような人と今まで会えなかつ

たというのが、それも、近くに住んでいて」

「ほほほ。縁日や、電車の中で会ってるかも知れませんが、ただ、あたし、平凡で目立たない女だから」

「そ、そんなことがあるもんか。僕は盲目じゃない」

怒ったように言い、大学生は自分がおかしくなったのか

「ははは。まるで、けんか腰だな」

と、笑った。

「僕は池田達夫です。よろしく」

「あたし、井手実千代と言いますの、鼻緒ありがとうございますございました」

二人は暗い広場で顔を見合せてあいさつし合った。陛下の御平癒を祈願に来て、それが、恋の散歩になったことは気が咎めたが、池田達夫は生まれて初めて、この娘に対して愛情を覚えた。初恋である。ひと眼で、と言う言葉は実感として蔽に存在することを、彼は二十四歳にして知った。

井手実千代は可憐という一言でつきる女学生だった。

聡明の閃めきが感じられるなぞと言う印象とは違って、その下ぶくれの愛くるしい容貌そのものが、彼女の肉体と、その性格を語っているような気がした。

お互いの第一印象は、やがて、また、二人の生涯の運

命を大きく左右することを、この時の若い二人は考えても見なかった。窓が盲目であることの証かも知れない。心字形池の暗い水面に丘のアーチ燈の葉もれ灯が微かに射して、噴水の音だけが高かった。涼みの客がちらほら見えたが、ここでも、天皇陛下の御不例が祟ってか、平素よりは淋しかった。

「鼻緒の事を櫓にして言うのは可笑しいけれど、これから、会ってくれますか」

「ええ」

「僕は不良じゃないから安心して下さい」

達夫は弁解するように付け足した。

「そんなこと、思ってませんわ」

「ありがとう。これからは自然に会えるようになるな。きつと。学校の往きや、帰りや、一ツ木の縁日でも」

「近いから」

「うん、今まで会わなかったのが不思議なんだから」

達夫がそう言った時、池をめぐる細道から、サーベルを鳴らして不意に白服の巡査が現われた。

二人は理由もなくハッとしたが八字髭の中年の巡査は傲然と睨めて

「君達はなにをしておるかね」

「はあ、散歩しています」

と、達夫が答えた。

「陛下の御不例を知っとる大学生が、ここらをうろちよろ徘徊して居ては申しわけなからう」

「はあ」

答えながら、達夫はむっとした。陛下の御不例と散歩との関係がうなずけなかった。

「そうそうに帰り給え」

言い残して、白服は反り身になって闇に消えて行った。

「いやですわね」

「馬鹿々々しいことを言うからな」

「あたし、電車に乗らずに歩いて帰りますわ。道ならば、お巡りさんだつとがめないでしょう」

「送ろう」

その短い会話は二人を急に近づけたようだった。

お加代は天皇陛下の御不例なぞはどうでもよくなつた。日は暮れかかるし、いくら、二重橋の前を往ったり、来たりしても、お嬢さんの姿は見当たらず、見知らぬ東京人の顔ばかりで泣きたくなつた。

桜田本郷町で乗り換えて、電車を馬場先門で降りたまでは、よかったが、そわそわと実千代の後から従いて行

くうちに主人を見失った。

人が多いのと、見なれぬ宮城前広場の夕暮れのたたずまいに氣を奪われたからであらう。

色は浅黒いが、眼の大きな、いかにも南国的な感じのする十七歳の娘は、桃割れの髪が乱れるのも忘れ、眼の色を變えて歩き廻った。御平癒の祈願などは、とうに忘れていた。

少し小遣いの入っていた巾着も持って来なかったし歩いて帰る他はなかったが、まかり間違うと、赤坂へ帰るつもりが品川あたりに着く不安があった。

交番で訊くのは恥ずかしいし、迷子だと訴えたら、田舎者だと笑われるだろう。

お加代は日がとっぷり暮れた時には泣き出したくなった。仕方なく、方角を定めて、祝田橋の方へ歩き出した時、

「お加代さん」

と、呼ばれた。

はっとして振り返ると、縞の単衣ひとえに三尺を腰のあたりに締めた大工の清次郎が笑いながら立っていた。

お加代にとっては、正に、地獄で仏だった。清次郎は井手家に出入りする棟梁の孫作の倅で、父を手伝って働くので、彼女は三時のお八つを運んだり、昼の茶を出す

ので顔見知りである。歳は二十だった。

「どうしたんだ。鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしてよ」

「お嬢さんが居なくなったの」

そう言って、お加代は少女らしく、べそをかいた。涙が溢れるのである。

「はぐれたのかい」

「うん」

「拜みに来たのか」

「うん」

「迷子になったんだな。ひとりで帰れるのかい」

「うん」

「電車なら、桜田門へ出るといいぜ」

「巾着持って来ないし、ほんだから、歩いて帰ろうと思つて」

「道は判るのか」

お加代は首を傾げて、不安そうに微笑して見せた。

「そうか。御神火育ちじゃあ判るめえ、送ってやらあ、面倒くせえが」

と、清次郎は怒ったように言った。

「にし（あなた）に悪いけど」

お加代は無邪気な笑顔をした。嬉しかったのである。

「俺みてえな職人が天皇陛下の御平癒を祈りに来ててもきき目はねえかも知れねえと思つたけれどな、国民だからなあ。だが、その歸りに迷子の御神火育ちを送ろうとは思わなかつたぜ」

「にしが、そんなにさわぐと、わし、しょうしい」と、お加代はしょうぼりして言つた。

「なにも騒いじゃ居ねえやな」

さわぐと言うのは叱ることで、しょうしいとは恥ずかしい意味なのは江戸っ子の清次郎には判らなかつた。

「おう、お加代さん、なるべく、日本語で話してくんな。でえ一、お前、にしたあなんだ。あなたと言いな」

「はい」

お加代は素直だつた。

「氣をつけるけど、すぐ、島の癖が出るでね」

「そりや、仕方がねえ。船賃の高え島から来ているんだからな。夫婦になつて、そんなわけのわからねえ言葉……」

言いかけて

「冗談じゃねえ、大島の御神火育ちと俺が夫婦になつたら、ちゃんちゃら可笑しくつて、へそが茶をわかさあ、あわてねえでくれ」

「あなたが言つたすら」

「なにをよ」

「夫婦になるって」

「よせやい。そりや、お前がどこかの男と夫婦になつても言葉が通じねえで不便だろうと言つてゐるんだ」

「以心伝心というのあるすら」

お加代は又、無邪氣に言つた。

「殿るぜ、そんな文句、誰から教わつた」

「お嬢さまからです」

「敵わねえ、赤坂の邸へ歸る道も知らねえ田舎娘にそんなハイカラな言い方をされたんじや、送つてやる氣もしねえや」

「ご免なさい」

「はははは、どうやら、日本語になりやがつた。なあ、お加代さん大島は暑からうから、みんな、すっぱだかで暮らして居るんじやねえのかい」

「着物を着てます」

「そうか、そいつは初めてきいた」

「ふふふ、清次郎さんはボクです」

「なにを、俺あ、ボクなんぞと書生言葉は使わねえ」

「口が荒いけど、心のいい人のことです」

「そうか、まあ、なるべく、日本語でいこうじゃねえか」

霞ヶ関の暗い大通りを歩きながら、二十と十七の男女は楽しかった。

虎の門の東京倶楽部の洋館に明るく灯が点^{とも}っていた。

「お加代さん、ここまで送れば、もう、独りで帰れるだろう」

と、清次郎が言った。

「奥さんがおつかないから」

お加代は独りになるのが心細かったし、清次郎にしても、この娘と別れたくなかった。

「叱られるかい」

「お嬢さんとはぐれて独りで帰ると叱られます」

お加代は標準語を使うのに氣を使った。

「怒ったって仕様がねえやな。大島育ちの娘をはぐれさせたお嬢さんの方がわるいんだ。なに言ってやがんでえ。いってえ、なんて叱るんだ」

「判らないけど」

「それ、見ろ。だけど、なんだ。月はあるが、恐ろしく暗え晩だ。俺と手つないで歩く方がいいかも知れねえな」

「こうするの」

と、言い、お加代はいそいそと清次郎の手を握った。

「ふん、大分、荒れてる手だな。だが、人と会ったら放

すんだぞ」

お加代は恥ずかしそうに頷いて見せた。

「俺はなんだか、こう、少し嬉しくなってきた。やだなあ」

清次郎は頭を掻いた。

「清次郎さんは大工になるずら」

「現に、大工じゃねえか。未だ、一軒の家は建てられねえが、タタキ大工たあ違うんだ。おやじの陰にかくれて見えねえが、腕はしっかりしてらあ」

「お内儀さんを貰うずら」

「そりゃ、まあ、なんだ、先へよって、いいのがあればなあ。お前は島へ帰って嫁に行くのかい」

「島へは帰らないで、東京でお嫁にゆけて、奥さんが言ってたから」

「そうか。ずっと東京にいるつもりか」

「うん」

お加代は頷いた。

「どういふ亭主がいいんだ。俺が世話してやってもいいぜ。大工でもいいか」

「ええ」

「俺ぐらいい大工でいいかい」

「いい」

「じゃあ、なんだ、ひき請けてやらあ。はははは、俺ぐらいでいいって事は、つまり、俺でもいいってえことだな、お加代さん」

「にしさえよければ」

「そうか。畜生、胸が一ぱいになって来やがった」

そう言い、若い職人は改めて、お加代の手を強く握りしめた。

勝手口から恐るおそる茶の間に顔を出した清次郎を見て、雅代夫人は微笑した。

「迷子になったお加代をわざわざ送ってくれたんですね、ありがとうございます」

「へい」

清次郎は井手博士や、その夫人の前に出ると思うように口が利けないから、もじもじしていた。

「実千代は未だ帰らないのよ」

「探していらっしゃるのかも知れませんが」

「二重橋の前は大変な人出なんですってね」

「へえ、それで、はぐれたんで御座いましょう」

夫人は未だ三十の半ばを過ぎたばかりで、大きい二人の娘の母にしては若く美しかった。団扇を使いながら

「清次郎はすっかり大人になったのね」

「へえ、どうも」

赤くなって額に手を当てた態度は、江戸っ子で、口こそ達者だったが、未だ、初心だった。

「小さいお嬢様は」

「琴枝は頭痛がするって、夕方から寝ています。あれも、十六だから、もう」

夫人は後を言わなかった。最近、月に一度は頭痛がすると言って寝込むのも女になった証であつた。

「でも、お加代はお前に会えて助かったわけね。さもないと、お巡りさんに連れてでも来てもらわないと、ほはほは」

「あつしも、言葉が判らねえものでございますから」

「いい子よ。大島ではアンコというそうだけれど、器量もいいし、気だても優しいし、清次郎のお内儀さんに向くわ」

「じよ、冗談を仰しゃっちゃ困ります。あんな、ちんぷん、かんぷんの娘なんざあ、あつしは真っ平で」

言いながら彼はいいいよ赤くなった。

「ほほほほ、清次郎は江戸っ子だから」

「先生はお留守で」

と、彼は話をそらした。

「急患が二つもあってね」